

1. 保健指導のあり方に関する研究

① 最近の二、三歳児の発達

母子保健研究部	加藤 忠明	・ 平山 宗宏
	水野 清子	
京都教育大学	松浦 賢長	
児童家庭福祉研究部	庄司 順一	
保健指導部	中野 恵美子	・ 青木 菊麿

要約：愛育病院で1989～91年に出生した児のうち、両親とも外国人、極小未熟児、ダウン症候群児を除き、保健指導部で生後1～36か月時に健診した乳幼児2152名を対象とした。1970年前後に同部で健診した2、3歳児と比べ、今回調査の方が達成割合が多かった項目は、「外でよく遊ぶ」、「友達がいる」、「二語文」、「歌う」（以上2歳半位での比較）、「円を描く」、「ブランコ」、「でんぐり返し」、「鉄棒」、「友達遊びの機会がある」、「友達と上手に遊べる」、「くせ無し」、「歯磨きする」、「おやつを規則的に与えている」（以上3歳位での比較）等であった。逆に今回の方が少なかった項目は、「階段ののぼりおり」、「よく歩く」（以上2歳半）、「三輪車」、「少食」、「むら食い」（以上3歳）等であった。これらの変化は、子どもの生活環境や親の意識の変化によると考えられる。1～18か月健診時の主訴数が多い場合、また、乳児健診時や1歳半健診時の発達項目の多くは、30～36か月児の「児の発達」と有意な関連が認められた。

見出し語： 二・三歳児、発達の比較、発達の予測性、幼児の生活習慣、乳幼児健診

The Development of Two and Three Year Old Children: Recent Findings Related to Health Guidance

Tadaaki KATO, Munehiro HIRAYAMA, Kiyoko MIZUNO, Kencho MATUURA,
Jun-ichi SHOUJI, Emiko NAKANO, and Kikumaro AOKI

Summary: Recent data on children at two and three years of age show earlier development in several domains (two-word sentences, drawing circles, etc.) than was the case among children 20 years ago. The recent cohort also exhibited better life activities (playing with friends, tooth brushing, appetite, etc.). But on a few item (climbing stairs, riding a tricycle, etc.) later development is the contemporary trend. These data may be due to changes in children's environment and in parents' consciousness. The numbers of complaints and the developmental items in health guidance in the first two years of life had significant correlations with the development in the following two years.

Key Words: child development, two year olds, three year olds, preschool children, and infant health guidance

I 目的

最近の乳児の発達¹⁾、及び1、2歳児の発達は²⁾、約20年前のそれらと比較してやや早い傾向が認められ、これは乳幼児を取り巻く環境の変化による差と考えられた。それらの報告に引続き今年度は、2、3歳児の発達を調査した。また、0、1歳児の発達に関する問診項目等が、どの程度発達の指標として意味をもつものなのか、2、3歳児の発達との関連性を分析した。

II 対象

対象は以前の報告とほぼ同様、総合母子保健センター愛育病院で1989年4月から1991年2月に出生した2324名のうち、両親とも外国人(163名)、極小未熟児(8名)、ダウン症候群児(1名)を除き、同センター保健指導部を健康診査のため受診した乳幼児2152名(男児1110名、女児1042名)である。この対象児のうち、生後11~12か月時の受診児は1448名(受診率67.3%)、生後13~14か月時の受診児は109名(5.1%)、生後15~16か月時の受診児は57名(2.6%)、生後17~18か月時の受診児は1264名(58.7%)、生後19~20か月時の受診児は99名(4.6%)、生後21~22か月時の受診児は23名(1.1%)、生後23~24か月時の受診児は1173名(54.5%)、生後25~26か月時の受診児は98名(4.6%)、生後27~28か月時の受診児は28名(1.3%)、生後29~30か月時の受診児は833名(38.7%)、生後31~32か月時の受診児は87名(4.0%)、生後33~34か月時の受診児は21名(1.0%)、生後35~36か月時の受診児は729名(33.9%)であった。最終集計時点を1994年1月としたため、その後を受診する幼児もいる。従って、3歳近くでは受診率がやや少なく、また逆に2歳前後の受診率は前回の報告よりやや増加した。対象児のうち1500~2499gで出生した低出生体重児は122名であった。

III 方法

主として母親への問診により記載されている保健指導部カルテ³⁾をデータシートに書き写した後、京都教育大学の大型コンピューターでSASを使用し分析した。最近の2、3歳児の発達を以下のように評価し、以前の同様の調査と比較等を行った。

1、発達及び生活習慣の達成割合

比較的受診児数が多かった生後29~30か月時、

35~36か月時の受診児に関して、発達や生活習慣の項目の達成割合を求め、2、3歳児の発達を評価した。月齢表示の達成割合は、例えば29~30か月児の場合、生後29か月0日から30か月30日までの受診時点で、ある発達項目等が可能であった割合である。以下1992年値と略す。

2、発達及び生活習慣の年代別比較

1970年前後に同部を受診した2、3歳児の同様の調査(調査期間は1960~1975年であるが、その約90%は1969~1975年出生児である。以下1970年前後値と略す)^{4、5)}と比較した。

3、発達の予測性

0、1歳児の月齢別の発達項目や主訴数(いずれも母親への問診による)と、医師または、心理相談による生後30~36か月児の発達評価との関連をみた。

心理相談での「発達」に関しては、位置関係の理解(上、後、前、下、中のうち2つ以上できれば可)、はめ板(三角、半円、十字、菱形のうち3つ以上で可)、眼前にない物の名(会話で2語以上)の3項目のうち2項目以上できない場合に経過観察を原則とした。「行動」は、場への適応性、対人行動、活動性・意欲、情緒の安定性、特異な行動・くせ等、また、「母子関係」は、愛着関係、親の態度等により必要な場合、経過観察した。

IV 結果

1、発達及び生活習慣の達成割合

29~30か月児833名、35~36か月児729名に関する主な1992年値を表1に示す。

1980年と1990年の幼児の発達に大きな差は認められなかった幼児健康度調査⁶⁾とは、対象月齢が多少異なるため、厳密な比較はできない。しかし、その中で同じ内容の項目をみると、2歳児(2歳以上~3歳未満)の「二語文」達成割合(不明を除く)は92.6%、3歳児が「円を描く」割合は94.2%であり、今回調査は、29~30か月児の「二語文」97.6%、35~36か月児の「円を描く」97.6%と比較的高かった。しかし、3歳児の生活習慣として、「衣服の着脱」、「ごっこ遊び」等に関しては、幼児健康度調査と今回の調査結果はほぼ同じ達成割合であった。幼児健康度調査で1980年から1990年にかけて2歳児24%→35%、3歳児25%→28%と増加していた「くせ有」は、今回の方がさらに多かった。

2、発達及び生活習慣の年代別比較

1992年値と1970年前後値に関して、カルテ記載が全く

表1 月齢別発達や生活習慣の達成割合（1992年値）

月齢	発達項目（達成割合 %）
29～30か月児	走る（99.6%）、両足とび（94.9%）、つかまって階段のぼりおり（93.0%）、つかまらずに階段のぼりおり（90.3%）、ボールをける（98.3%）、三輪車をこぐ（37.0%）、垂直線を描く（90.4%）、外でよく遊ぶ（94.5%）、友達がいる（88.7%）、他の子に関心を示しまねる（98.1%）、単語（99.8%）、二語文（97.6%）、よくしゃべる（98.5%）、歌う（96.1%）、なあにとよく聞く（95.1%）、歯みがき（97.3%）、手洗い（99.1%）、排泄のしつけ開始（89.6%）、誘って排泄可能（71.1%）、排泄する前に教える（71.9%）、衣服の着脱自分でしたがる（74.6%）、くせ有（49.2%）、指しゃぶり有（24.8%）
35～36か月児	両足とび（99.5%）、足を交互に踏み出して階段のぼりおり（93.2%）、三輪車をこぐ（74.0%）、でんぐり返し（88.4%）、鉄棒（95.6%）、ブランコ（93.2%）、はさみで切る（96.6%）、円を描く（97.6%）、友達がいる（92.8%）、友達と上手に遊べる（96.8%）、ごっこ遊び（96.9%）、母から離れて遊ぶ（92.0%）、要求や意思を言葉でいう（98.6%）、姓名をいう（92.5%）、どうしてと質問が多い（91.2%）、歯みがき（98.3%）、手洗い（99.4%）、日中の排泄問題無（83.6%）、夜の排泄問題無（75.9%）、衣服の着脱大体できる（87.3%）、くせ有（47.1%）、指しゃぶり（25.8%）

同じ内容の項目は必ずしも多くはなかったが、その項目のみを比較した。

①生後2歳半位での比較

29～32か月児の1992年値と1970年前後値に関して、「外でよく遊ぶ」幼児の割合は、前者806/858=93.9%、後者788/1031=76.4%、「友達がいる」割合は、前者778/884=88.0%、後者1098/1482=74.1%、「二語文」を話せる割合は、前者841/861=97.7%、後者960/1061=90.5%（以上3項目は $p<0.001$ ）、また「歌う」割合は、前者837/872=96.0%、後者844/914=92.3%（ $p<0.01$ ）と、1992年値が有意に多かった。これらの結果、即ち最近の幼児には友達がいって言語発達が早い傾向である点は、昨年度の23～26か月児の調査結果と同様であった。

しかし、「つかまって階段をのぼりおりする」29～32か月児の割合は、1992年値816/887=92.0%、1970年前後値263/270=97.4%、「つかまらずに階段をのぼりおりする」児の割合は、前者696/778=89.5%、後者556/597=93.1%（両者とも $p<0.01$ ）と1970年前後値が有意に多かった。また「だっこが多い」幼児/「よく歩く」幼児の比率は、1992年値163/804、1970年前後値67/678であり、最近の幼児の方が「だっこ」は多かった（ $p<0.001$ ）。

②生後3歳位での比較

発達に関して、35～36か月児の1992年値と、35

～38か月（90%以上は35～36か月）児の1970年前後値の比較では、「円を描く」割合は、前者694/711=97.6%、後者814/863=94.3%、「ブランコ」をこげる割合は、前者660/708=93.2%、後者699/946=73.9%（以上2項目は $p<0.001$ ）、また、「でんぐり返し」できる割合は、前者604/683=88.4%、後者792/934=84.8%、「鉄棒」で遊ぶ割合は、前者656/686=95.6%、後者788/844=93.4%（以上2項目は $p<0.05$ ）と、運動発達は1992年値が有意に早い項目が多かった。しかし、「三輪車をこぐ」幼児の割合は、1992年値502/678=74.0%、1970年前後値1019/1161=87.8%（ $p<0.001$ ）と1970年前後値が有意に多かった。

生活習慣に関して、「友達遊びの機会がある」幼児の割合は、1992年値652/703=92.8%、1970年前後値1053/1482=71.1%、「友達と上手に遊べる」割合は、前者663/685=96.8%、後者862/994=86.7%、「くせ無し」の割合は、前者343/648=52.9%、後者344/819=42.0%、「歯磨きする」割合は、前者707/719=98.3%、後者834/1199=69.6%であり（以上4項目は $p<0.001$ ）、友達とよく遊び、くせが少なく、歯磨きする幼児が最近、有意に増加していた。

食生活に関して、食欲が「良」：「普通」：「少食」：「むら」の比率は、1992年値120（39.5%）：147（48.3%）：28（9.2%）：9（3.0%）、1970年前後値567（40.1%）：309（21.9%）：279（19.7%）：259（

18.3%)であり、幼児の食欲が普通であると思っている親に比べて、少食やむら食いと思う親は最近、有意に少なくなっていた(共に $p < 0.001$)。おやつを規則的に与えている親の割合は、1992年値 $485/553=87.7\%$ 、1970年前後値 $460/587=78.4\%$ と、1992年値が有意に多かった($p < 0.001$)。

3. 発達の予測性

30～36か月健診で小児科医の診察により発達上要経過観察となったり問題点を指摘された4人(0.4%)、30～36か月健診で心理相談員により、「発達」に関して経過観察の必要性を認められた95人(11.7%)、「行動」を経過観察116人(14.0%)、「母子関係」を経過観察116人(14.0%)、「その他」の心理上の問題点(家庭環境、生活リズム、母親の希望等)を経過観察47人(6.2%)について、有意な関連がみられた1～18か月健診時の問診項目等を表2に示す。

乳児期の発達や主訴数と、8～12か月健診時⁷⁾や18～24か月健診時²⁾の要経過観察例との関連を調査した以前の報告に比べて、乳児期の項目数は少なかった。しかし、1歳健診時や1歳半健診時の発達項目や主訴数と、30～36か月時の要経過観察例との有意な関連は多く認められた。

以前の報告と同様、1～18か月健診時の主訴数が多い場合は、30～36か月時に経観となる割合が比較的多かった。また、一般的な乳児期の発達項目、「お座り」、「つかまり立ち」、「はいはい」、「伝い歩き」、「一人歩き」、「発語」、「命令理解」等、そして、1歳半健診時の発達項目の多くは、30～36か月児の「児の発達」と有意な関連が認められた。1～18か月の各月齢で発達が遅れている場合、30～36か月児の発達が経過観察となる割合が多く、逆に発達が比較的早い場合、経過観察となる割合は少なかった。しかし、「あやすと笑う」、「首すわり」等の乳児期初期の発達項目との関連性は、以前の報告に比べて少なかった。

V 考察

都会の子どもの生活環境や親の意識は、最近20年くらいの間に大きく変わり、それらのことが2、3歳児の発達や生活習慣に影響を及ぼしているようであった。最近、子どもの遊び空間が以前よりさらに減少し、室内遊びが増加しているが⁸⁾、家族のことや心の問題が重視される傾向にあるといわれる⁹⁾。身のまわりに階段をのぼりおりできる場 また、三輪車を乗り回す安全な場が

少なくなっているためか、これらを使用する運動機能達成割合は以前より少なかった。しかし、幼児には外遊びや友達がいることの大切さが一般に認識される傾向があり、そのため、自分の子どものことを、外でよく遊んで、友達と上手に遊べると回答した母親が増加したと考えられる。また、近くの公園に行ってブランコや鉄棒に接する機会が以然より増えたため、それらを使って遊ぶ幼児が増加したのであろう。

食生活に関して、最近では肥満を警戒し始めたため、また、順調に発育発達していれば少食等は余り心配ないと、母親達が理解するようになったためか、子どもが「少食」や「むら食い」と思う親が減少したと考えられる。

1～18か月児と、2、3歳児との発達には関連がみられた。ただし、その関連とは、一般の2、3歳児が経過観察となる割合10～20%が、1～18か月時の発達で多少遅れ気味の場合20～30%くらいになる程度であった。また、年齢差が開くほど、関連のある項目は少なくなっていた。表2に示した発達の問題項目等は、発達の指標として重要な意味をもつが、年齢が大きくなった時の子どもの発達を予測できるものではない。発達が多少遅れている乳児の親に対して、将来に不安を与えないよう、心配事等に適切に対応することが必要である。

参考文献

- 1) 加藤志明、望月武子他：最近の乳児の発達。日本総合愛育研究所紀要第27集：7～10、1991。
- 2) 加藤志明、望月武子他：最近の一、二歳児の発達。日本総合愛育研究所紀要第29集：15～18、1993。
- 3) 高橋悦二郎監修：乳幼児健診と保健指導。医歯薬出版、1993。
- 4) 加藤志明、望月武子他：乳幼児期の情緒・言語発達に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第25集：3～8、1989。
- 5) 望月武子、加藤志明他：乳幼児期の運動発達、生活習慣に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第26集：12～14、1990。
- 6) 日本児童手当協会、日本小児保健協会：平成2年度幼児健康度調査報告書。1991。
- 7) 加藤志明、望月武子他：発育・発達に関する縦断的研究。日本総合愛育研究所紀要第28集：7～16、1992。
- 8) 仙田満：子どもの遊び環境の変化。NIRA政策研究、7(3)：16～19、1994。
- 9) 統計数理研究所：国民性の研究、第8回全国調査。1989。